



スーパースターから学ぶ、 プロフェッショナリズムと自然体

| 公益財団法人慈愛会 今村総合病院／鹿児島県言語聴覚士会 | 上村 悠野

2025年6月3日、日本全国を衝撃のニュースが駆け巡った。「ミスター・プロ野球」、長嶋茂雄の逝去である。いわずと知れた昭和の大スターであり、天覧試合でのサヨナラホームラン、「メークドラマ」、「セコム、してますか?」等々、平成生まれの私であっても過去の活躍や記憶に残る語録を多数見聞きしたことがある。エンターテイナーとしての役割を全うされた人柄や、数々の功績、野球というスポーツを国民的なエンタメに昇華し、日本中から憧れの的となったその生きざまは、まさにスーパースターといつても過言ではないだろう。その長嶋の悲報に驚き、悲しみに暮れ、大きな喪失感を味わったのは何も筆者だけではないだろう。

では、長嶋茂雄という人物がいかにして日本中にその名を轟かせたのか、読者の皆様はご承知の上だと思い、改めて紹介するまでもないこととは思うが、筆者の思いの丈を述べたいがために、まずは長嶋氏の功績を振り返りたいと思う。

長嶋茂雄は、千葉県白井町で四人兄弟の末っ子として生を受けた。小学6年の頃から野球をはじめ、高校時代まではほぼ無名選手だったが、高校3年の夏の南関東大会千葉県予選において、敗れはしたものの、高校通算唯一の本塁打をバックスクリーンへ放っている。この特大の本塁打を見ていた記者たちから伝え聞いたスカウトたちが、長嶋に注目し、実業団や大学、ひいては読売ジャイアンツからのオファーもあったようだ。なお、当時長嶋の父は進学を希望しており、それを理由にジャイアンツからのオファーにも長嶋の

耳に入れないうちに断っている。プロ入り志望だった長嶋はその決定に激怒した、という逸話も残っている。

そのような背景には、現代とは少し異なった野球への価値観があった。長嶋が大学入りした1950年代ごろは、「東京六大学野球こそ日本野球の頂点」という認識の有識者もいたほどで、プロ野球はまだ確固たる地位を築けずにいた。「プロ野球=遊びを仕事にしている」との意見も珍しくなく、大学生はエリートであり、卒業の暁には社会に奉仕すべき、という考えが主流であった。長嶋は、そんな人気絶頂の大学野球界で「立教三羽鳥」として名をはせ、当時の東京六大学野球の通算本塁打記録を8本に更新し、東京六大学最大のスター選手となった。その長嶋の去就は全国民注目の的となり、鳴り物入りで読売ジャイアンツへ入団することとなる。

ルーキーイヤーからの活躍ぶりもすさまじく、最終打撃成績は打率3割5厘、本塁打29本、92打点と本塁打王と打点王の2冠を獲得、打率も2位の好成績であった。他にも最多安打を獲得し、盗塁も37個で1位であった。数年前に「トリプルスリー」という言葉が流行語にもなったが、これは「打率3割、本塁打30本、盗塁30個」以上を同一シーズンで残した者に冠した言葉だ。日本プロ野球史上これを達成したものはたった10人しかおらず、長嶋の成績は新人ながら本塁打あと1本と迫った大記録であった。その1本というのも、実はホームランを放ったにもかかわらず、ベースを踏み忘れるという失態を行ったために無効となった幻の本塁打であり、本

来であれば新人において「トリプルスリー」を達成していた、とも言われている。

東京六大学野球のスターだった長嶋の華々しい活躍により、以降、大学からプロ野球へ進む選手も増えたといわれている。世間の注目度やメディアの扱いもプロ野球がアマチュア野球を上回りはじめ、プロ野球に対する偏見も自然と消えていった。

長嶋が入団した年の前後は、戦後メディアの形も大きく変化している時代であった。民放テレビ局が一気に開局し、世間の注目は現上皇様、上皇后様の「成婚パレード」、そしてあの伝説の「天覧試合」へとつながる。プロ野球史上初めて、昭和天皇、皇后両陛下が観覧に訪れ、その目の前で長嶋はサヨナラホームランを放ったのだ。長嶋の入団当初こそは、民放のプロ野球中継も巨人戦だけではなく他チームの試合も放送していた。しかし、長嶋の「サヨナラホームラン」以降、「プロ野球中継＝巨人戦」、そしてその中心には必ず「長嶋茂雄」がいた。

長嶋を形容する言葉に「記録よりも記憶に残る漢」というものがある。確かに同時期に活躍した選手といえば、通算868本と世界記録の本塁打を放った「世界のホームラン王」王貞治や、日本プロ野球史上最多である3,085安打を記録した「安打製造機」張本勲、「400勝投手」金田正一など、現代でも破られていない大記録を記録した名選手たちが数多くいる。長嶋も決して、記録の面が劣っていたわけではない。シーズン最多安打10回は未だに破られないプロ野球記録であり、打率ベストテン入り通算13回も右打者歴代1位。通算2,471安打は金本知憲に破られるまで長らく大卒選手の歴代最多記録だった。ベストナインは17回であり、入団から引退まで現役全シーズンのベストナイン受賞は史上唯一の選手である。成績としても超一流でありながら、なお「記憶に残る漢」として認知されているのはやはり、その一挙手一投足に華があ

り、独特のキャラクターにスーパースターでありながら親しみを覚えたからだろう。三振をしてヘルメットを豪快に飛ばす姿、引退時に語った「我が巨人軍は永久に不滅です」という名文句。監督として「メークドラマ」やメディア出演時の様々な表情、セリフ。まさに選手であり、監督であり、演出家であり、主役であり、そして、いつもそばに寄り添ってくれるような、そんな温かみも感じられる人物であった。

長嶋の二つ名として、もっとも有名なもの、ぴたりと当てはまる言葉はやはり「ミスター・プロ野球」だろう。彼の言動、その生きざまはまさにプロフェッショナリズムの塊であり、まさに絵にかいたようなスーパースター。打ってほしい時に打ち、華麗な守備で魅了し、巧みな話術は人々の好奇心をくすぐり続けた。「プロ野球」を背負い、体現し、その生涯をもって国民を明るく照らし続けた。彼の葬儀にて王貞治が、「『長島茂雄』に戻ってゆっくりとお眠りください」とねぎらった意味は、まさに人々の望む「長島茂雄」を演じ続けた人生だったからであろうと推察できる。

さて、大変長らく、長嶋茂雄の功績をともに辿ってきたが、ここは「鹿児島市医報」の場である。普段から医療現場でご活躍されている皆様に、筆者は何を訴えたいのか。それは、彼の人生はプロ野球そのものであったということ。彼は大衆が望む姿を常に体現し、人々が望むプロフェッショナルであり続けた、ということだ。では、ひるがえって私たちの仕事はどうだろう。

私は今、言語聴覚士として総合病院に勤務している。言語聴覚士という職業は脳卒中等の後遺症により「失語症」となった方のコミュニケーション支援や摂食嚥下障害に対する評価・訓練、小児の発達支援など、多岐に及ぶ。リハビリテーションの職種としては理学療法士、作業療法士から約30年遅れて国家資格となった。ありがたいことに、その認知度は

年々向上してきており、病院内外で活動の幅を広げてきている。つまりは、皆のなかに「言語聴覚士とはかくあるべき」という姿が共通認識として出来つつあるということだ。それは当然、院内で求められる役割や、患者・家族が考える言語聴覚士のイメージが確立されてきているということである。就労というものは賃金の対価として、自身が持つ専門的な技術・知識を持って他者や社会に奉仕することである。つまるところ、私たち一人一人はその道のプロであり、患者・家族はそれらを享受するために病院へ通っている。話を戻すようではあるが、長嶋茂雄の生きざまは「ミスター・プロ野球」であり、プロ野球界に人生のすべてを捧げたといつても過言ではないだろう。比べること自体おこがましい話ではあるが、私の仕事はどうなのか。私の一挙手一投足、言葉一つ一つにどこまでプロ意識を持ち、情熱を注ぐことが出来ているのだろうか。手前みそではあるが、一つ、言語聴覚士としての専門性と、自身の職務の大切さを実感した例がある。

ワレンベルグ症候群という疾患をご存知だろうか。脳卒中が原因で、「歩く嚥下障害」とも呼ばれ、麻痺や高次脳機能障害はほとんどなく、嚥下障害が特筆して現れる疾患だ。その患者は40代の男性で、私が担当した当時、自身で歩ける能力を持ちながら、唾液すら飲み込むことが出来ずに胃瘻によって栄養を摂取していた。唾液が飲み込めないくらいだ。当然水分や食事の摂取など到底困難である。ワレンベルグ症候群によって、嚥下の際に食道入口部が開かなかったためだ。一般的な嚥下障害、そしてワレンベルグ症候群の中でも最重度に値するような例であり、そのリハビリテーションは非常に難解であった。

まず取り組んだことは「バルーン訓練」である。バルーン訓練とは、嚥下障害を持つ患者に対し、食道にバルーンカテーテルを挿入し、食道入口部の筋肉を拡張させることで飲

み込みを改善させる訓練方法である。一度行うごとに、患者は激しい嗚咽と喘鳴があった。それを訓練ごとに数十回、毎日行うのだ。身体的にも、精神的にもかなりの負担をかけていた。ただ、なかなか訓練効果は表れない。唾液の多くは吸引にて吸い上げられ、口から摂取できるものは増えず、訓練は過酷だ。患者とは常に対話をしながらも、時には訓練の内容を変えたり、時間を変えたり、思いに寄り添い、併走することしかできないような時間も流れた。

訓練の大枠は維持しつつ、定期的に嚥下造影検査（VF）を行い、訓練効果の確認も行った。電気刺激による筋力増強や、従来の嚥下機能練習に回顧したり、嚥下に効果的と言われる最新機器を取り寄せ、試用したりもした。とにかく試行錯誤の日々が続いた。一か月経過し、ようやく少量の水分を飲めるようになった。徐々に訓練が実を結び始め、二か月経過したときにはプリンを一つ完食できた。患者の目には光るものがあり、私も苦しみながらも決して諦めなかつた患者の強さに感服したことを今でも覚えている。約三か月で自宅退院となった今でも、主な栄養摂取は胃瘻中心ではあるが、ごく少量であればどんな食品でも摂取が可能となった。そして、現在は自宅にて、継続的にあのバルーン訓練を自身で行っている。患者は今、食べられることの喜びや、家族と食卓を囲めることが何よりも幸せだと話していた。

もちろん、身体的、精神的に追い詰められながらも、諦めずに経口摂取ができるところまで回復した患者の頑張りがあってこそではあるが、私自身、日々頭を悩ませ、試行錯誤し、よりよい選択は無いかと奔走した。まさに全身全霊をもって取り組んだ日々だったといえる。

私たち言語聴覚士の仕事は、患者、そしてその家族の人生に寄り添うことである。子どもの発達支援においては、その子の未来を拡

げること、安心できる場を提供することにある。疾病を抱えた方の支援においては、いかにその方の元の生活に近づけられるか、元のコミュニティを守れるか、周囲の理解の輪を拡げられるか、そういう対応は私たちの職務の一側面ではないかと考える。

その道に身を置き、情熱をもってその世界を究めんとする人物のことを、人は「プロフェッショナル」と呼ぶのだろう。どんな業界、どんな分野でも簡単なものはなく、上には上がいる世界だろう。時には挫折や、立ち止まることだってあるかもしれないし、うまくいかないことを嘆く時があるかもしれない。長嶋茂雄のプロフェッショナルたる所以は、観客の望むプレーや言動を、ここ一番で披露できたことであり、それが自然体であったことだ。長嶋茂雄が「長嶋茂雄」であったことだ。

秒進分歩ですすむ医療業界、混とんとした社会情勢。ただ、成すべきことは不变であり、患者や家族はいつも「プロフェッショナル」の私たちを待っている。自身を大きく見せる必要はないが、一つ一つのケースに対しそれぞれに真摯に、そして丁寧に、それでいて、楽しむことを忘れないようにいよう。私たちの仕事は、毎晩のようにお茶の間にテレビ放送され、脚光を浴びるような世界ではないだろう。ただ、テレビと一緒に囲む、お茶の間の幸せを守ることにはつながっているのではないだろうか。

スーパースターの人生が、私たちに夢や希望を与えてくれたように、私たちも日々の職務に一生懸命取り組むことが、縁あって関わられた方の人生の豊かさに寄与できるのではないか。

「プロフェッショナリズム」とは、自身の職責を全うすることであり、それをライフワークとすることではないだろうか。気負わず、自然であることは、相手の緊張をほぐし、等身大であることではないだろうか。自然体で、いつでも期待に応えられる、記憶に残る

仕事をしていきたい。スーパースターの人生を振り返り、私はそう考える。

